

News Letter

■2012年12月25日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は11件が採択されました。本号では、シリーズ第3回として、教育学部南 学先生の「心の法則発見」におけるPBL教育の実践報告を掲載します。

2012年度開講 「PBL教育支援プログラム」成果報告 (3)

「PBLセミナーF 心の法則発見」

導入した科目の概要

PBLセミナーFは、共通教育統合教育科目の1つで、文字通りPBL的な手法を用いた授業で、とくに本科目はサブタイトルにある「心の法則」を発見し、自ら検証することを目的とした授業です。

学生の到達目標

大きくは、1)人間の心の働きについて注意深く観察を行い、そこに横たわる法則性に気づくこと。2)その法則性を自ら検証する方法を小グループで協力して考え、実施すること。3)得られた知見をわかりやすく伝えること。の3つを目標としました。

PBLを導入した意図・目的

心理学専攻でよくおこなわれる、グループで研究テーマを見つけ、自ら文献を調べたりしながら研究をおこなう授業手法が、PBLの要件に合致すると考えました。具体的には、実際に問題を設定し、データをとり実証するという心理学研究のプロセスの中に、観察する、文献を調べる、現象について多角的に考える、被験者の観点からデータ収集について考える、考察を深めるなどの活動が含まれており、これらを体験することは、他専攻学生にとっても有意義なさまざまな学習経験の機会があると考えたため、導入しました。他専攻学生を想定するために、心理学研究法や統計的分析法などの専門性の要求を省いた形で、1年次生向けの授業としてアレンジをしています。

実際の授業内容

[ステップ1:アイスブレイキング]

ここでは、今後のグループ活動を円滑かつ効率的におこなうために、お互いに打ち解けることを目

指して、ロールプレイ型の他己紹介ゲームをおこないました。ゲームを通じて、メンバーは自分が他者にどう見られているのを知り、実際はどうであるかを紹介することで、自然と自己紹介が進みました。また、ゲーム中には多少気恥づかしいことをする必要があり、それがお互いの壁を崩したと考えられます。

次の時間には、グループで決定をおこなわせる課題(NASAゲーム)をおこないました。この課題を通して、メンバーが意見をきちんと出し合えば、よりよい決定となるという経験を体感的に得ることができたと思います。

[ステップ2:テーマの探索]

自習タイムの各自の文献検索とPBLタイムのグループでの意見交換を繰り返す中で、自身の関心や探究したいテーマを明確にさせました。

[ステップ3:アイデアの収束]

KJ法を用いて、クラス全体で関心があるテーマの収束をおこないました。この過程を通して、似たような興味をもったメンバー同士でグループを編成できるようになりました(図1)。



図1 KJ法によるテーマの整理と絞り込み

〔ステップ4:テーマの明確化〕

グループ内で相互に興味がある心的事象について、文献検索や友人からの聞き取りなどを通して、理解と問題意識を明確にしていきました。この段階では、教員とTAは理解を深めるような課題をそれぞれに与え、それを調べてくることで問題意識を絞り込めるような助言をおこないました。また、この段階で中間発表会を設けることで、受講生の目標への意識付けをおこないました。

〔ステップ5:検証仮説の明確化〕

実際に検証する仮説を絞り込み、どのようにすればそれが実証できるかの方法を模索しました。この段階では教員とTAは専門的見地からの助言や提案をおこないました。今年度はとくにMoodleの利用を徹底し、グループごとの活動の活発化と深化をねらいました。

〔ステップ6:検証の実施〕

受講生は質問紙法や実験法を用いて、仮説を検証することを目指し、データの収集をおこないました。その後、データの集計をおこない、得られた結果が仮説通りであるのか、また予想外の結果が得られていないかなどについて、協力しながらまとめていきました。今年度は例年以上に実験的手法を用いるグループが多く、準備・実施などに手間取りました。

〔ステップ7:結果の発表〕

まとめられた結果を、筋道たてて、かつ効果的に発表できるよう、クラス内での最終報告会をおこない、教員とTAはそれに対する助言をおこないました。最後は、心理学系のPBL3クラス合同の発表会を開きました。

成果

各グループともユニークなテーマと仮説を設け、データの集計とまとめに努め、他専攻の1年次生にしてはかなりレベルの高い発表ができたと思います。とくに合同発表会に参加したグループの1つは、「TVゲームをする際に、コントローラを必要以上に傾けたり動かしたりするのはなぜか」という、専門的にも現象名があるのかどうかもわからない(したがって、研究されているのかどうかもわからない)こと(図2)をテーマとして、独自に仮説を立てて検証していききました。



図2 コントローラを必要以上に動かしている行動例

今後の課題

教員の方針として、できるかぎりグループの関心を尊重し、必ずしもアカデミックな研究が蓄積されていない研究テーマも推奨しましたが、その分教員・TAは専門的な見地からの指導や助言が難しくなり、本来ならもっと高められたグループもあったのかもしれませんが、また、グループでの活動に厳しい要求をしたため、却って活動が停滞したグループもあった可能性もあります。今後、もう少しはじめから領域を絞り込むのか、受講生の希望を認めるのかについて検討の余地があると思います。

また、15回で1年次生にテーマの設定からデータ集計、発表までを課すこと自体に無理があるのかもしれませんが、学生たちの可能性を信じて続けてみたいと思います。(南学)

おしらせ

12月1日付で、本センターに教員が着任いたしました。

益川優子 特任講師

三重大学ならではの教育に携わる機会を頂き、大変幸運に思います。私自身も学び続け、同時に学びの楽しさを皆様にお伝えできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

